

幼児期における造形活動に関する一考察

One Consideration about Modeling Activities in Preschool Children

隼瀬大輔・今井亜胡

HAYASE Daisuke, IMAI Aiko

はじめに

日常的な生活や遊びなど幼児期の子どもにとって身の回りのものごと全てが「未知」ものである。子どもたちは見たり、触れたり、聴いたりといった身体的な感覚を使いながら、「未知」であるものごとや人について「遊び」を通して学んでいる。「幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。」¹と示されるように、子どもたちは外部環境と関わりながら、その中にある「私」を通して考え、時には模倣し、「私」を自己表出している。その方法の一つである造形活動を、保育園や幼稚園などに限らず、家庭における遊びの中でも子どもたちは行っている。

幼児は「環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こす。そうした体験の連なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていく。」²と示されるように、多くの体験を通じて多くのものごとを感じて吸収していく。そのため、幼稚園では「幼児期にふさわしい生活を展開する中で、幼児の遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、人と関わる力や思考力、感性や表現する力などを育み、人間として、社会と関わる人として生きていくための基礎を培うことが大切である。」³とされ、また、幼稚園は「家庭で体験できない社会・文化・自然などに触れ、教師に支えられながら、幼児期なりの世界の豊かさに出会う場である。」⁴とされ、保育者や保護者は、子どもたちの発達段階に応じた環境や場面を設定することが必要である。造形活動の中にある子どもたちの自己表出を受け入れ、共感していくことも大切である。

幼児期における造形活動の意義

上記のように幼児期の子どもたちにとって、多くのものごとに触れながら感じ、考えることは大切である。本論では幼稚園教育要領の『感性と表現に関する領域「表現」』⁵に含まれる幼児期の造形活動の方法に着目し考察する。松岡は造形活動を a.身体機能の発達、b.認知機能の発達、c.創造性の発達、d.感受性や感情の発達、e.社会性、の5つに分類し、造形活動は「この5つの発達それぞれに対して寄与することができる。」として、多くの発達に関わる活動であることを示している⁶。

「遊び」について

幼児期の遊びについて「幼稚園では、幼児の自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも必要である。」⁷とされているように、各園では様々な「遊び」を確保している。その「遊び」について、松岡は「自由遊び」と「設定遊び」を次のように分類している。「自由遊び」とは、保育者の誘導や指導がなく子どもたちが自由な時間に材料や道具、環境などに働きかける「遊び」で、家庭での「遊び」と同様のものである。一方、「設定遊び」とは、保育者が意図やねらいをもって活動を提案したり、指導したりする遊びと定義している⁸。

花篤、岡田らは、幼児の造形活動を「造形遊び」と「造形表現」の二つに分類している。「造形遊び」

は、素材や用具などに触れながら、何をつくるか、何ができるかといった発想や構想、目的を子どもが模索し決定していく造形活動である。さらにその「造形遊び」には、自由な遊びの中で子どもが素材とかかわりながら感覚を働かせたりイメージを持ったりする「自然発生的な造形遊び」と、幼児が興味を持ちそうな素材で幼児の造形性を意識し題材化する「設定的な造形遊び」に分けている。一方、「造形表現」は、幼児自らの思いや気持ちのイメージを持って表現していく活動としている⁹。

花篤らは幼児期の造形活動である「造形遊び」と「造形表現」をさらに詳しく次のように分類している。「造形遊び」を①「空間遊び」(場所や物的環境へ働きかけるような遊びの活動)、②「材料遊び」(素材・材料とのかかわりそのものが遊びとなる活動)、③「構成遊び」(素材・材料を並べたり、重ねたり、組み合わせたりする遊びが中心の活動)、④「操作遊び」(技法的な操作行為によって色や形に対する感覚を感じさせながら遊ぶ活動)、⑤「模倣遊び」(素材や行為からイメージを広げ、自分なりのイメージで表現する活動)、という5つに分けている。「造形表現」は、①「心象表現」と②「適用表現」に大別し、さらにその詳細を分類している。①「心象表現」とは心にわきあがった気持ちや思いなどもとに色や形で表す活動であり、a「生活表現」(生活経験で出合ったことや感情をもとに表現)、b「空想表現」(お話や空想をもとにした表現)という二つに分類している。一方、②「適用表現」は、a「遊びや生活に役だつもの」(遊びや生活の中で使うもの)、b「機能的なもの」(動く、飛ぶなどの機能的な面白さを求める表現)、c「かく」と「つくる」(完全に分化できないような多様な表現)という3つに分類している¹⁰。

以上のように幼児の造形活動は詳細に分類できるが、実際の子どもたちの造形活動を「造形遊び」と「造形表現」と明確に分化することは難しく、連続したり、相互に重なり合ったりすることもある。しかし、保育者はこの二つの活動について指導内容を明確にするために、指導者の立ち位置を明確にしておく必要がある。「造形遊び」の背景には保育者の誘導や指導が存在しているため「自由遊び」ではなく「設定遊び」といえる。そのため、幼児の興味や発達段階に応じ、主体的な活動を促す題材を保育者が設定する必要があることを松岡は指摘している¹¹。

また松岡は「造形遊び」と「造形表現」の思考の過程の違いについて、造形活動の構成要素をA「発想・構想・目的」、B「素材・材料」、C「技法・行為」という3つに分けた上で、幼児の二つの造形活動について次のように述べている。「造形遊び」はB「素材・材料」やC「技法・行為」から始める造形活動(図1)とし、「造形表現」はA「発想・構想・目的」から始める造形活動(図2)と定義している¹²。通常、大人の造形活動ではA「発想・構想・目的」から始まるとされているが、幼児期の子どもたちはB「素材・材料」やC「技法・行為」から始まる造形活動が見られる。

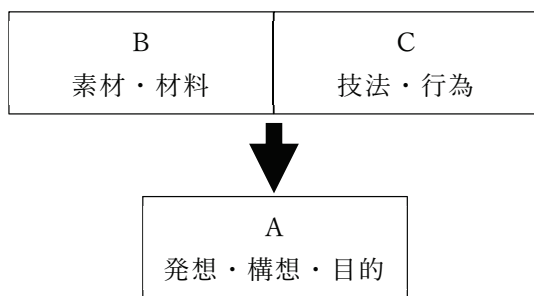


図1 「造形遊び」の例

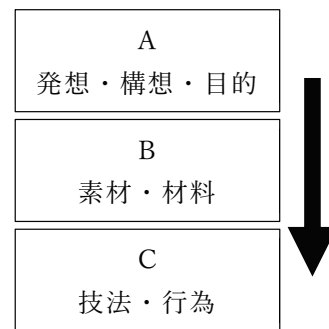


図2 「造形表現」の例

この構成要素の思考過程の違いによる内容の差別化は、小学校図画工作科の内容においても同様の構造が存在する。「造形遊びに表す」活動は、「児童が材料に進んで働きかけ、思いのままに発想や構想を繰り返し、技能を働かせながらつくることを通して学習すること」と示され、「絵や立体、工作に表す」活動は「児童が感じたこと、想像したことから発想や構想をし、技能を働かせながら絵や立体、工作に表すことを通して学習すること」と示されている¹³。

調査目的および調査方法

本論では、造形活動について外部講師に学びながら実践している岐阜市の認定こども園の黒野こども園で行われた2つの造形活動の実践を対象とし、造形活動における子どもの思考過程に応じた保育者の援助のあり方について考察する。

黒野こども園を調査対象とした理由として、幼稚園教育要領や保育所保育指針に準拠した教育を行い、造形活動の実践に力を入れている点や、それぞれの幼児が持つ多様な表現を見守りながら育てることを目指し、造形活動の「過程」の中にある子どもたちの活動に着目する実践を行なっている点があげられる。

まず、調査園で行われている造形活動がどのように教育課程に組み込まれているかを明らかにするために行ったヒアリング調査の結果を示す。次に、調査園で行われた実践のフィールド調査の結果より、調査園の造形活動において子どもの思考過程に応じた保育者の援助方法について考察する。

調査対象園の造形遊びについて

ヒアリング調査は、2020年12月10日(木)9時から黒野こども園において1時間行った。調査協力者は、園長、主幹保育教諭、年長クラス担任教諭の計3名である。調査者は今井が行った。調査方法は半構造化インタビューを採用し、調査協力者に同意を得た上で調査時の音声はICレコーダーですべて記録した。調査者があらかじめ用意した質問項目は「園における『造形遊び』の位置付け」、「造形活動の年間指導計画の作成」、「園において『造形遊び』で大切にしていること」、の3項目である。

(1) 園における『造形遊び』の位置付け

黒野こども園では、「遊び」をとおして、「環境と共振できる」「環境と共鳴できる」「環境と共創できる」子どもの育成を目指す教育・保育を展開している。保育室で行われる教育・保育活動としては、役割遊び、構成遊び、机上遊び、造形遊びなどがある。『造形遊び』では、活動を通して保育教諭が子どもと同じ視点で接する機会を作るようにしている。低年齢の子どもは言葉を用いて自分の気持ちを表現することが難しいため、意識的に五感を用いた活動を多く取り入れている。

(2) 『造形遊び』の年間指導計画について

園としては、年間を通した指導計画を作成しているが、子どもたちの興味関心に基づいて、様々な遊びを展開しているため、年間指導計画どおりに行われなことが多い。そのため、日々の活動を書き留めて、次の活動へ生かすことのできる記録を作成し、その記録をもとに一人一人の子どもに対する援助のあり方を職員全体で検討するようにしている。

(3) 園において『造形遊び』で大切にしていること

ヒアリング調査の結果、黒野こども園の『造形遊び』で大切にされていることが集約した3点について事例とともに説明する。

- ・ いろんな素材で五感を通した体験ができるような仕掛けを考えている
 [例] 0歳児にはゼリーボール（食用色素で着色した口に入れても害がないゼリー）を用いて、潰した時の素材の感触を味わうことや、他の色のゼリーボールと混ぜたときの色の変化を視覚的に楽しめるような五感を刺激する遊びを取り入れている。
- ・ 様々な用具を使う経験ができる遊びや題材を取り入れている
 [例] はさみ、色鉛筆、クレヨン、のりなどの様々な用具を使う『造形遊び』を取り入れて、目的に応じて用具を使えるように学んでいる。
- ・ プロセス（過程）も重視するようにしている
 [例] 一斉に絵を描いたり、何かを作ったりする活動だけでは、作品を完成させることが重視さ

れる。子どもたちの興味関心に基づき、活動を選択させる『造形遊び』を通して、「どのように作ったのか」というプロセス（過程）を見ることを通して、子どもたちの考えていることや感じていることなども理解できるようになり、子どもに合わせた適切な援助ができるようになった。

ヒアリング調査の結果より、0歳児のゼリーボール事例では、ゼリーボールという「素材・材料」に触れその感触を味わうことや、異なる色のゼリーボールを混ぜると変化するという「技法・行為」を視覚的に感じる内容が行われていた。また、用具の使い方についても、目的のために使い方を覚えるのではなく、「造形遊び」を取り入れながら使い方を学ぶという工夫がなされていた。調査園では、「同じもの」を「同じ方法」で描く造形活動だけでは、子どもたちの完成作品という「結果」を重視してしまう傾向があったため、幼児が持つ多様な表現を見守りながら育てることを目指し、「過程」の中にある子どもたちの活動に着目するために「造形遊び」を多く取り入れ、それぞれの子どもにあった援助の方法を考えるようになったという。

黒野こども園で行われている『造形遊び』では、花篤らが示す「造形遊び」「造形表現」の両者が行われており、発達段階に合わせ相互に行き来する内容であることがわかった。

次に調査園で外部講師によって行われている実践のフィールド調査を行った。調査園が造形活動の指導を外部講師に依頼した理由は、若手保育者への研修と多様化する子どもたちの姿をしっかり受け止め、子どもに合わせた援助方法を見出すためである。

フィールド調査の結果および考察

フィールド調査は、著者2名で行った。調査を行った実践は、1歳児クラスで行われた「転がるもので遊ぼう」と、年長クラスで行われた「星空の秘密基地」の2実践である。両実践とも幼児造形を企画するArte colore（アルテコロレ）の桐嶋歩氏が行い、それぞれのクラス担任は子どもたちの援助を行いながら、桐嶋氏の実践を学んでいた¹⁴。

以下では、各実践についてその実践概要を詳述した上で、黒野こども園で展開されている「造形遊び」において、子どもの思考過程に応じた保育者の援助方法について考察する。

(1) 実践1「転がるもので遊ぼう」(1歳児クラス：2020年11月19日(木)9時30分～10時15分)

①テーマ設定の意図：(外部講師に確認した上で主幹教諭から送られたメールの回答より)

まるいかたちや動くものは乳児にとって親しみやすい題材であることから、今回テーマとした「転がるもの」では、卵型のもの、ゴツゴツした表面のものなど、「大きさ」「材質」「重さ」「色」が異なる様々な種類の丸い形を揃えました。また、転がる形を楽しむためにお皿や段ボールで作った滑り台などの用具の準備もしました。素材の面白さをより深く感じるために、お皿や滑り台などの用具を取り入れて、素材(転がるもの)に十分に親しむための時間をつくっています。こうした導入方法や用具の準備などを少し工夫するだけで子どもの興味・関心は1より10に膨らむと思っています。

②活動のねらい：(外部講師に確認した上で主幹教諭から送られたメールの回答より)

子どもは転がるものを生きものに見立てて遊ぶこともあり、素材や用具を優しく扱う姿も見られます。子どもに対するねらいは、「いくつかの種類の中、子どもが自分のお気に入りを選び、素材に親しみを持つこと」、「動くものを目や全身で追い、身体の発達に繋ぐこと」、段ボールで作った不安定な滑り台や大きなトレイなど、子どもがひとりでは扱えない用具を用意し、「保育者と子ども、子ども同士が協力しなければ遊びが成立しない造形遊びを理解すること」という3点です。また、「こうした活動を子どもたちと一緒にやることを通して、その過程を見ながら保育者の声かけが豊かになること」というねらいもあります。

③素材・材料：

絵の具(青, 赤, 黄), 模造紙がはめられた段ボールのトレイ, ゴムボール, どんぐり, スーパーボール, ガチャ玉, 卵型のおもちゃなど

活動の流れ：

STEP 1 一緒に観察・探る		
① ボールあそび(その1)	② ボールあそび(その2)	③ ボールあそび(その3)
		
ボールで遊ぶ	お皿の中にボールを入れて遊ぶ	段ボールトレイの中にボールを入れ、トレイをみんなで動かしながらボールを転がす。
STEP 1 一緒に観察・探る	STEP 2 やってみる→STEP 3 発見・気づき	
④ ボールあそび(その4)	⑤ 転がしあそび	
		
講師が絵の具をつけたボールを段ボールのトレイの中で転がしてみる。ボールの軌跡によって絵の具がつくことをみせる。	ゴムボールの他に、どんぐり、スーパーボール、ガチャ玉など、転がせるモノに絵の具をつけて転がす。	絵の具の入ったお皿の中にどんぐりを入れて、転がる様子を観察する子、他に転がりそうなモノに絵の具をつけて転がしてみることが登場する。
STEP 1 一緒に観察・探る	STEP 2 やってみる	STEP 1→STEP 2→STEP 3
⑥ みんなで鑑賞会	⑦ 転がしあそび	⑧ 布玉スタンプあそび
		
模造紙を取り出して、みんなで鑑賞する。模造紙を見て「きれい！」と口にする子どもがいた。	新しい模造紙に代えて、お皿に絵の具を補充して、もう一度ボールなどに絵の具をつけて転がし遊びをする。	布玉に絵の具をつけスタンプ遊びをする。たくさんの絵の具を布玉につけて模造紙の上で布玉を絞って絵の具のみを落として遊ぶ姿も見られた。

STEP 1 一緒に観察・探る	—	
⑨ みんなで鑑賞会	⑩ 片付け①	⑪ 片付け②
		
<p>模造紙を取り出して、みんなで鑑賞する。</p>	<p>養生シートについている絵の具を雑巾でふきとる。</p>	<p>養生シートを片付ける。</p>

④考察：

アルテコロレでは「そざい探究あそび」という造形活動を「そざい探究のしかた」という3つの段階に分けて行っている。本実践はこの段階に分けながら考察を行う。

「STEP1 一緒に観察・探る」では、講師(桐嶋氏)が子どもたちに素材の面白さを言葉とその素材の動きで紹介したり、その素材を使ってどんなことができるかを演示したりする。子どもたちは講師の演示をもとに素材を自由に使って遊びはじめる。段ボールでできた「坂」でボールを転がす、お皿の中でボールを転がすなど「丸い形＝転がる」という造形的な面白さに子どもたちが関心を示すような導入が行われ、その際に講師は「コロコロコロ」という擬音語を用いることで「素材・材料」の特徴を子どもに伝えていた。

「STEP2 やってみる」では、はじめはカラーボールのみを使い、しばらくして講師が大きさや形状の異なる転がるモノを使って「転がしあそび」をし始めると、数名の子どもは保育室の玩具箱から転がすことができるモノを取り出してきて「転がしあそび」を始めた。また、素材の「転がる形」という造形的特性に、絵の具の「色」という要素を加わった。

「STEP3 発見・気づき」として、実際の活動で絵の具が手に色がつく感触やボールが濡れるという感触を楽しんでいる子どもの様子が見られた。また、このような場面で講師は自分の手に絵の具をつけて「ベトベトするね」という言葉を使ってコミュニケーションをはかっていた。

実践1を構成する各活動はおよそ5～7分程度となっており、1歳児が飽きずに活動に取り組めるように工夫されていた。最初の活動から最後の活動までずっと参加していた子どもは5名であった。調査園は育児担当制を採用しており、それぞれの子どもの対して担当する保育教諭が決まっている。各保育教諭の判断により、各子どもの活動へ参加するタイミングの調整が図られていた。

「トレイを傾ける」活動は、隣にいる友達と協力しなければ、トレイを傾けることができないため、子どもたちの中に無意識のうちに協同的な活動が生まれていた。

本実践で講師は、それぞれの過程において基本の活動を十分に行う時間を確保したり、擬音語を添えながらその過程にふさわしい活動見本を示し、素材・材料のおもしろさや使い方を理解させたり、講師は子どもたちが探究するきっかけを「しかけ」設定していた。

また、アルテコロレでは、子どもだけに活動をさせるのではなく、「観察・探る」、「やってみる」、「発見・気づき」という活動を子どもと保育者が一緒におこない、それぞれの場面で子どもたちと発見や感動や共感することも大切にしていた。

調査園では上記の外部講師の実践を保育者にとっての研修の場として位置付け、保育者が子どもたちの活動を近くで見ながら援助の方法を学ぶことも大切にしていることがわかった。

(2) 実践2 「星空の秘密基地」(年長クラス：2020年11月19日(木)10時30分～11時35分)

①テーマ設定の意図：(外部講師に確認した上で主幹教諭から送られたメールの回答より)

「星空の秘密基地」では「切れ込みを入れる」「小さな無数の下穴を開ける」などの加工を施した、「しかけ」のある大きな段ボールを使用し、子どもの“ついついやってみたくなる”という気持ちを刺激する遊びです。その「しかけ」としては、立方体の「おうち」になる大きさの段ボールの準備し「組み立ててみたくなる」、扉を付けることで「大きな箱に入ってみたくなる、狭いところや暗闇に入ってみたくなる」、段ボールに小さな穴を開けておくことで「小さな穴をほじくってみたくなる、覗いてみたくなる」などの気持ちをくすぐるように想定しました。また、完成見本を見せることや活動内容の詳細を伝えずに、保育者などの大人と一緒に遊びに参加しながらヒントを与えていくという活動となるように設計しました。

②活動のねらい：(外部講師に確認した上で主幹教諭から送られたメールの回答より)

活動のねらいは、子どもたちが素材や用具で保育者と一緒に遊びながら、「何ができるか」、「どんな工程が必要か」を主体的に考え創造できることと、子ども達が用意されたいくつかの異なる工程を通して1つ1つの工程でできあがるものを確認しながら制作の面白さを見出し新鮮な気持ちで楽しく取り組めることの2点です。

③素材・用具：

錐で小さな穴があけてある段ボール3枚、 絵の具(赤、黄)、 ローラー、 ボウル、 穴あけ用鉛筆、 スティックのり、 セロハン(2センチ程度の正方形)、 養生シート

活動の流れ：

STEP1 一緒に観察・探る	STEP2 やってみる	
① 何が作れるのかを考える	② 段ボールを組み合わせる	③ おうちの形に成形する
 <p>段ボールの3つのパーツを組み合わせると何ができるかを考える。 子どもたちみんなが「おうちができる」と分かるまでいろんな組み合わせを考える。</p>	 <p>段ボールをおうちの形なるようにみんなで力を合わせて、組み合わせてみる。</p>	 <p>おうちの形にガムテープで固定し整えていく。おうちを作る工程が理解できると子どもは進んでそれぞれがガムテープを取りに行き、貼り合わせ始めた。ガムテープがなかった子は段ボールを支えるという役割を見つけて行っていた。</p>

STEP 1 一緒に観察・探る	STEP2 やってみる	STEP2 やってみる
④ おうちの中に入ってみる	⑤ 穴を大きくする	⑥ ローラーで色塗り [前半]
  <p data-bbox="183 869 574 981">おうちの中に入ってみると、無数に空いた穴から光が入ってくることに気づく。</p>	 <p data-bbox="619 611 1013 813">はじめから開いている小さな穴を手がかりに、鉛筆を使って、穴を大きくする。子どもたちは小さな穴を探してどんどん穴を開ける。</p>	 <p data-bbox="1038 611 1406 723">ローラーに絵の具をつけて壁や屋根の色塗りをする。最初は単色で色塗りをしている。</p>

STEP2→STEP3	STEP1→STEP2	STEP 1 一緒に観察・探る
⑥ ローラーで色塗り [後半]	⑦ のりでセロハンを貼る	⑧ おうちの中に入って観察 [前半]
 <p data-bbox="183 1473 574 1585">講師が異なる色を塗り始めると、二色の絵の具を混ぜて色塗りする子が現れた。</p> <p data-bbox="183 1603 574 1805">はじめは二色が混ざらないように注意深く塗っていたが、混ぜても良いことに気づくと、二色を混ぜると色が変わることを発見している子どももいた。</p>	  <p data-bbox="619 1731 1013 1886">「穴をセロハンでふさぎたい」という提案に、子どもたちが「のりではればいい」と回答。のりでセロハンをはる作業を行う。</p>	 <p data-bbox="1038 1473 1406 1675">セロハンを貼り終えたおうちの中はどうなっているかを観察する。子どもたちは全員おうちの中に入って、最初の時と比べる。</p>

STEP 1 一緒に観察・探る	STEP2 やってみる	-
おうちの中に入って観察 [後半]	明かりを入れる	片付けとおわりのあいさつ
 <p>講師がスマホの光を照らし、その光を動かしながら「流れ星、見える？」などと声かけしながら、おうちの中の子どもたちの見え方の違いに気づかせる。「見えた！」などの反応。</p>	 <p>担任の先生におうちの中に入ってもらい、子どもたちがスマホの光を外から照らし、その光を動かす。</p>	<p>養生シートなどを講師と一緒に片付けて、今日おこなったことを振り返って活動終了。</p>

④ 考察

実践2は、年長クラスの希望者7名で行った造形活動である。活動①では、「活動のねらい」のとおり、「何をつくるのか」を子どもたちに考えさせるために、段ボールのパーツを「どうやって組み合わせようか」「とびらみたいなのがあるね」「穴があいているね」などと講師がヒントとなる声かけを行った。この声かけを頼りに、子どもたちはこれから作るもののイメージを広げていた。

実践2において「そざい探究のしかた」の「STEP3 発見・気づき」が見られたのは、活動⑥である。活動⑤で子どもたちは単色で壁や屋根の色塗りを行っていた。まだローラーの動かし方に習熟していない子どもたちはローラーをちょこちょこ動かすため、一度に色塗りができる範囲が狭かった。子どもたちがローラーで色塗りをするのをしばらく見守っていた講師が子どもたちの塗った色とは異なる色をつけたローラーを壁の端から端まで大きく動かした。子どもたちは講師の真似をしてローラーを動かし始めた。すると、子どもたちのローラーの動かし方に変化が生じただけでなく、塗る色にも変化が起きた。赤色と黄色の絵の具を混ぜた色で壁面を塗る子どもが現れた。この子どもの出現がきっかけとなり、二色の絵の具の分量を変えながら色を作る子や、色の塗り方を工夫する子が現れた。つまり、講師の誘導により表現の幅が広がっていた。

また、本実践のねらいには、“つついやってみたいくなる”という造形的な好奇心を生む「しかけ」が存在している。「未完成の段ボールからどんな形ができるかを子どもたちが主体で組み立てながら考えること」、「小さな穴に鉛筆を差し込み広げてしまうこと」、「大きな造形物をローラーで伸び伸びと塗ること」、「小さな空間にみんなで隠れること」など、家庭でできないことや、場合によっては怒られてしまうような活動を、広い場所を活用し大人数で行うことができる内容が行われていた。こうした広い空間や人数を活用し行われた今回の活動の中で、大きな段ボールを友達と協力して組み立てること、子どもたち自身で色ぬりの進行具合を確認しながら助け合うなどの「協同性」が生まれていた。

また、ローラーの色塗り方に関して、大人の塗り方を真似してみることや友達と同じ色を選んで塗るなど他者を意識して活動することが見られ、造形活動を通したコミュニケーションが生まれていたといえる。完成した秘密基地の中に入る際には、「まだ入っちゃダメだよ!」「みんなが入れるよ

うに奥まで入って！」など子どもたちの中で「ルール」なども生まれていた。

まとめ

二つの実践を通して、講師は子どもたちの発達段階を考慮し、五感を刺激したり、感情を動かしたりする造形活動を「しかけ」として準備していることがわかった。また、「造形遊び」は子どもたちが主体の活動であるものの、全てを子どもたちに委ねるのでなく、保育者が子どもたちの伸ばしたい力を考慮した上で、子どもが主体的に動ける幅のある題材を設定することが必要であることがわかった。

保育者は方法論を示すだけでなく、本実践で確認されたような子どもたちの中で生じる現象、すなわち子どもがどんな発見をしたかを子どもたちと一緒に活動しながら、感動を共有し理解することが大切である。一方、保育者は子どもたちにどんな新しい「未知の世界」の体験場面を設定できるかを試行錯誤することが必要となる。保育者は子どもに比べ経験が豊富であるため、子どもたちのような柔軟で積極的な探究ができなくなることもある。しかし、だからこそ子どもたちと共に遊び、同じ目線に立つことが大切なのではないだろうか。

【謝辞】

たいへんお忙しい中、本研究の調査にご協力、ご助言いただきました黒野こども園の西垣安久園長、津田安紗美教諭、西垣浩康教諭、アルテコロレの桐嶋歩氏にこの場をお借りし改めて心より御礼申し上げます。

¹ 文部科学省, 2019, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館

² 文部科学省, 2019, 前傾書

³ 文部科学省, 2019, 前傾書

⁴ 文部科学省, 2019, 前傾書

⁵ 文部科学省, 2019, 前傾書

⁶ 松岡宏明, 2009, 「第Ⅱ部 幼児造形教育」, 『美術教育概論 (改訂版)』, 大橋功 監修・編著 新関伸也ほか編著, 日本文教出版, p.71

⁷ 文部科学省, 2019, 前傾書

⁸ 松岡宏明, 2009, 前傾書, p72

⁹ 花篤實, 岡田愨吾, 2009, 『造形活動 理論・実践編』, 三晃書房, pp.53-56

¹⁰ 花篤實, 岡田愨吾, 2009, 前傾書, pp.53-60

¹¹ 松岡宏明, 2009, 前傾書, pp.72-73.

¹² 松岡宏明, 2009, 前傾書, pp. 72-73.

¹³ 文部科学省, 2019, 『小学校学習指導要領 図画工作編』

¹⁴ アルテコロレは愛知県日進市を拠点に、子どもの学びと育ちを支える「あそび」を提案する会社。子どもだけでなく、子どもと大人と一緒に関わりながら「あそぶ」企画を提案している。